が途中で子供が目醒めたものか、或は子供より先に自分が眠つて子供が機嫌を損ねてゐるのか判らなかつたけれども、兎に角彼女だけ眠つてゐて子供が泣いてゐるのだつた。部屋の光線も十分でなく又眼も屋内の暗さに馴れてゐなかつたので、はつきり彼女だとは分らなかつたけれども、子供が起きてゐるのを知らずにゐては、たとへそれが惡意あつてのことではないにせよ、主人の手前もよくなからう。といふ親切心から、

「もし〳〵、今日は大變遲くなりまして……髪結ひでございます――。」と聲をかけてから部屋へ一歩踏み入つたのだ。

「あつ！」と髪結ひは仰天した。危く聲をたてさうになつたのを辛うじて堪へた。そして一瞬我が眼を疑つた。

子供と寢てゐる彼女に頭が見えなかつたのだ。暑い夏、蒲團の中にもぐり込んでゐるのでもない。單衣一枚でも汗だくになる位だ。勿論そんなものは用ゐてゐなかつた。では一體首を何處へやつたといふのだらう。

「そんな莫迦氣た話があるもんぢやない。自分の見誤りかも知れぬ。そんなことより奥樣の髪が先だ。つまらぬ好奇心から詮議だてして折角のお顧客樣を女中の機嫌を損ねて失敗るのは愚の骨頂

だ。」髪結ひは咄嗟に思案して、魅せられかけた好奇心をあつさり捨てると、奥の方へ更に聲をかけながら進んで行つた。

さて仕事を終へて出て來た。先刻のこともあるので、妙な氣持で出て來て見ると、例の美しい女中がお勝手に子供を抱いてゐた。

ちやあんと立派な顔がついてゐる。

髪結ひは不審に堪へなかつた。作り笑ひを浮べると、それとはなしに、ちらつと女中を見たが、そこに何の異常もなかつた。しかし、髪結ひの女は心中ほつと安心の吐息を洩しはしたもの丶、といつて自分の眼を疑ふ氣にも矢張りなれないで、變なちぐはぐな心を抱いて歸つた。そしてこの日の出來事は自分の胸一つに納めて誰にも何もいふまいと思つた。

その後も三四日おきには樋宮の妻の髪を結ひに行つたけれども、別段何の變つたこともなくて過ぎた。

ところが、それから後幾らも經たない或る日例の女中の居なくなつてゐるのに髪結ひ女は氣がついたので、それとはなしに訊ねて見た。

「あの女中さんは─洗濯休みにでも在所の方へ行かれましたか。」といふと、他の女中が答へた。
「い丶え、お暇が出たんですよ。」
「へえー、それは又何故でせう。なか／＼好いた女らしかつたのに──」
「え丶、好い人のことは申し分ないんですけれども、あの人は眠つてゐる時によく首を見えなくすることがあつて……。」
「それはまあ大變、夜寢てゐる時ですか。」
「夜もさうですけど、夜ばかりでなく、晝間でもさうなんです。いつもとは限りませんけど、時々首が失くなることがあるんです。始めの程は誰も皆自分の見間違へだらうか、或は寢相の惡い人だ位に思つて默つてたんですけど、それがあんまり始終なもんだから、しまひには、家中で誰一人知らない者がなくなりまして、最初のうちは不思議に思ひましたけど、そのうちにだん／＼氣味が惡くなつて來ましたし、あの女も居にく丶なつちやつたんでせう。お暇が出ました。」
「はあ、では外には何も不都合を働いたといふんぢやなくつて、首がなくなるからなんですね。不思議なこともあればあるもんですねえ。」
「眠つてゐるうちだけ、時々首がなくなつて、目が醒めるとちやんとあの美しい顔がくつ丶いて

ゐるんですからねえ。幾ら何でも、あれぢやとても氣持が惡くつてねえ。外にあ、別にこれといふ不都合なんかある譯もないんでせうけど、でも……。」といふ譯で到頭お暇といふことになつたんだといふことだつた。
髪結ひ女は矢張り自分の間違へぢやなかつたのだと思つた。しかし何も言はなかつた。
その後、暫時の間樋宮の家には何事もなく至極平和の日が流れた。
夏もいつしか去つて秋風の立ち初める頃、不圖子供─たつた一人の─が體の加減を惡くした。大したこともなさ丶うに見えたけど、可愛い丶子供のこと丶て、色々と手を盡した。しかし、何と言つても未だ小さ過ぎるので手當の甲斐もなく到頭ぽつくり死んでしまつた。
最愛の子供に別れた丶め急にがつかり氣落がした丶めか、それとも看病疲れのせいだつたか、子供の葬式が濟むと間もなく、樋宮の妻は何だか氣分がすぐれないやうに見えたが、快々として樂しまない日が續いて何となく体に衰へが見え出して來て次第に瘠せ細つて行つた。そして憂鬱な顔をしてぶら／＼してゐる日が多くなつた。床に就いて見たり起きて見たりしながら養生もして見たけれども、結局それ以上よくも惡くもならなかつた。醫者にも見せた。けれども醫者は

「別段これと言つて體に異常がある譯でもない。要するに神氣の疲れだから、精々體に精分をつけるやう養生する以外に手の盡しようもない。」と言つた。

格別とりたてゝ惡い容體でもなかつたのに、次第に衰弱した結果だつたらう、それとは人の目には判らなかつたけれども。秋の終らうといふ頃、散る木の葉に誘はれる如く、ぽつくり妻も死んでしまつた。

かう急に妻子が引き續いて亡くなつて見ると、今までゞさへも家族數に較べて稍ゝ廣過ぎた家は俄かに寂しくなり、何となく陰氣くさいじめ〳〵したものになつた。その上、妻子に別れると、さう幾人かの召使も事實必要がなくなつたので、だん〳〵少くなつて來たから猶更だつた。

今や、血族としては自分以外に一人も居なくなつた樋宮は獨り後に殘されて味氣ない日を送つた。親類縁者もあるにはあつたが、樋宮はひし〳〵と迫る孤獨と寂寥の感に堪へられなくなつて來始めた。

そして樋宮は突然主君に致仕を願ひ出た。彼は急に人生に對して嫌厭を覺えたのだつた。奉公人全部に暇を出し、家財その他一切の身代を金に替へた彼は、飄然として放浪の旅に出た。放浪の旅にもとより目的のあらう筈もなかつたが、彼は日本中の神社佛閣、靈域聖地を巡拜しようと思ひ立

つたのである。

樋宮程すべての境遇に惠まれた人も、一朝人生の行路に於て苛まれると、忽ち無常を感じて、こんな心境に立ち至つたものと見える。いや、今まで餘りに惠まれ過ぎてゐたゝめに、猶更急にさうなつたものと考へていゝかも知れない。彼は藩中決して中以下の身分でも境涯でもなく、まして生活が窮迫してゐたのでも無論なかつた。そればかりか、事實彼は武士として立派な人だつた。强い氣性だが矜しい心の持主であり、正直で潔白な氣質であつたが、その精神は洗練されて居り、その上鍛錬された腕と身體は藩中に於て決して人後に墮ちるものではなかつたのだ。

それにもかゝはらず、相次いで最愛の妻子に別れると、その教養の高いにも似合はず、人の世の果なさといふものをしみ〴〵感じて、遁世の志止み難きまゝ、逝く秋とゝもに遂巡禮となつて、やがて間近に迫りつゝある冬の寒空へと彷徨ひ出たのである。

二

そゞろ憂世に無情を感じ、飄然巡禮への旅に出た樋宮は一と先づ道を、神社佛閣の多い都へと志して辿つた。

急ぐ旅ではなかつたが、日數經るまゝに漸く年の瀨も押し迫る頃、國境へと行き着いた。有難い

お寺も幾つか拜んだし、尊い神樣にも數多くお詣りした。北陸の海岸傳ひに、かうして續ける旅は流石に樂ではなかつた。身を切り骨を刺すやうな寒い風、明けても暮れても灰色の空に舞ふ白い雪。でも今日だけが自分に殘された越後の路、今過ぎては何時の日にか再び踏む土地と思へば、此の世に絆持たぬ身ではあるけれども、しかし心ひかれるものを覺えぬ譯には行かなかつた。

折から道は峠になつた。雪と風は愈々ひどい。太陽の光さへ通さぬ厚い灰色の空は益々低く暗くなつて來た。股まで達する道なき道をやつとのことで峠の中腹まで辿りついた。時刻も大分遲いらしい。彼はもう一歩も歩かれないやうな疲れを覺えた。

立ち止つて身體に降りかゝつた雪を、肩から袖からはた／＼と拂ひ落した。ついでに厚く重く積つた笠の雪を拂つて、さて再び杖を握り直した。肌は熱湯のやうな汗に潤つてゐたけれども、耳朶や鼻柱にうける風雪は針で突き刺すやうだつた。

疲れたといつて此の儘此處に止まる譯には行かぬ。「ほつ」と吐息を洩して四邊を見廻した。咽喉が燒けつくやうだ。口の中は乾々になつて止み難い渴を感じた。彼は思はず一握りの雪を手に掬つて口中に入れようとした。が何思つたものか、その雪をそつと離してしまひ

「『雪は豐年の兆』」といふ。同じ水の變形したものながら雪は雪。人間の渴を癒すべき性質のものではない。人生の不幸に苛まれた儘だ。用ふべからざるものを用ゐる位なら、折角旅に出た意義が失はれる。辛さを忍び苦に堪へて、自然の道に從ふこそその志だ。儘は故鄕長岡出立のその砌心に何と誓つたらう。此の世に於ける一切のもの、すべてそれにあらざるものは絕對に用ゐまい。さう堅く決心しながら、何といふことだ。雪が自然の力によつて水に還元したものならば格別、さもない限りに於て、雪は飽くまで雪だ。……おゝあれは人家ではあるまいか――」と、かう獨語しながら、不圖自分の發見に驚いて口を噤み、更に薄墨色の濃くなつた空から間斷なく落ちて來る模糊たる雪の帷をすかすやうにした。

「たつた今拂ひ落した筈なのに早もうかうだ。」と呟きながら、再び雪にすつかり包まれた自分の身體を眺めつゝ笠の紐を緊め直した。

向ふの森蔭に山を背負つて建つ家を全く偶然に彼は見出したのだ。深い積雪の中にそれとも定かでない家を見出した彼は、杖を力にまるで泳ぐやうな恰好で雪の中を進んだ。

家の入口と同じ高さにまで雪の堆い目的の家の玄關に這入つて彼は始めてほつとした。でも降りかゝる雪からだけは完全に逃れ得た彼は重い笠の紐を解くと、次に身體の雪を拂ふべく、ばたばたと緩慢に手を動かした。

「もし此の家で宿泊を拒られたらどうしよう。」ふとそんな取り越し苦勞が腦裡を掠めた。

「幾ら何が何でもこの雪ぢや、たとひ殺されたつて、どこへ行くことも出來ぬ。『山中の一軒家』だ。きつと淳朴な人達の住居だらうから、巡禮への奉捨をまさか、拒みはしまい。」と思ひ直したもの丶、日數が淺くさうしたことには未だ不馴れな樋宮はおづ／＼聲をかけた。

「雪の道に難澁する旅の巡禮に何卒一夜をお貸し頂けませんか。」と。

家の中から樋宮の聲に應じて、人が出て來たらしく、入口の戸が內側から開いた。

朦々と立ちこめる紫色の煙と共に煖い氣がさつと戸外に靡いた。けれども戸外を歩き續けて來た樋宮の頬には、その空氣は冷たく濁つたものに感じられた。

「おう誰!?あゝ巡禮さんか。さあお這入りなさい。」とその人は如何にもそんなことは何でもないことだ。こんなことは冬中始終あることだ。といつたやうな、人を扱ひなれた調子で答へた。

「さあお這入りなさい。寒かつたでせう。この雪ぢや道中もなか／＼大變だ。」と終りは樋宮にともなく獨り言ともつかぬやうな調子で言ひながら、先に立つて樋宮を屋內へ導き入れた。旅人が宿るには未だ幾らか早い時刻ではあつたが、樋宮は此の家の主人の態度に對して非常に好感を覺えたので、請ぜられるまゝ爐端に座を占めた。

薪に不自由しない山住みのことゝて爐には豊かな焚火が燃えてゐた。渇いた咽喉も焚火のにほひのする一碗のお湯を振舞はれて頓に快適になつた。樋宮は旅に出てしみ／＼と人の情といふものを嬉しく感じてゐたが、殊にこのやうに、自己の好意をそれと意識せずに見せられた時位嬉しく感じたことはなかつた。

夕飯の支度の出來るまで樋宮は爐端で主人と話した。冬の雪道の難澁なこと、雪のために蒙る害のこと、雪のために起つた最近の悲慘事について、今年の稻作のこと、樋宮の祈願や目的地、さては今日までに拜んで來た神社佛閣の話など、それからそれへ話が續いた。こんなにしてゐると樋宮は全く別天地にゐるやうな氣がした。そのうちに、爐にさがつた自在鍵の鍋が二三度かけたり、おろしたりされたかと思つたら、

「さあどうぞ。山の中のことほんのお腹をふさげるだけですけど、何卒澤山――」と言つて熱い粟の粥が出た。

主人もなか／＼の話好きらしく

「冬はまあ殆ど毎日と言つてもよい位、儂んとこでは旅の方をよく泊めます。まあ一日に一人は必ずといつてもよく、時によると三人連、五人連といふ方もありまして、それらのいろ／＼の方が

様々の話をして聽かせて下さいましてねえ――」と言つて、夕飯後も次から次へと話し續けた。

依然荒れ狂ふ雪の音と爐に湯氣を吹く鐵瓶の音のみが聞えて、一寸話が切れた。

「いやこれはどうも、お喋りばかりしてゐて失禮いたしました。嘸ぞお疲れだつたんでせうに。もう床の用意は出來て居りますから、いつでもどうぞ。」と主人が言つた。樋宮は、

「私こそえらい御造作をおかけいたします。ではお言葉に甘へさせて頂きます。又明日の旅を控へて居りますから……。」と主人に挨拶して床につくことにした。

山の中の一軒家とは、とても思へない大きな家だつた。その上田舍には珍しい立派な家でもあつた。しかし家族以外は別に奉公人と思はれる人は居なかつた。そして家族も五六人位は居るらしかつたが、樋宮の顏を合したのは、最初から今まで對座してゐる主人と、晩の食事の世話をして呉れた主人の連合らしい女の人との二人だけだつた。そんな譯で彼は全部の家族と顏を合した譯ではなかつた。樋宮は床の中で、

「なか〳〵親切な好い人達だ。『渡る世間にや鬼がない。』とよく言ふが、全く本當だ、此の家ぢやとても人扱ひになれてゐて、それが又實に氣持がよい、儂に餘計な氣遣ひさせまいとしてゐる。一人でも必要以外の家族に逢はせないようにしてゐるなんて、一夜泊りの旅人に對する心遣ひの行

き屆いてゐる點から見ても、確かに此處で世話になる人が毎日多いに違ひない。」溫かな寢床の中に伸々と手足をのばして、外に聞える寒さうな音に聽入つて居るうち、いつかしらぐつすり眠つてしまつた。

三

ふと樋宮は眼が醒めた。未だ眞夜中らしかつた。

「どれもう一寢入りするかな。」と寢返りうつと再び眼を瞑つた。けれどもどうしたのか眠れなかつた。すつかり眼が冴えてしまつた。幾度か寢返りうつた。擧句の狀、彼はぽつかり目を開いて見るともなしに天井などを眺めて居るうちに、不圖高窓の明るいのに注意が引かれた。

「ぢやもう夜明けかな？」と思つたが、こそとも物音のしないのに氣がついた。さうだ。さういへば先刻から少しも雪の降るらしい氣配もなかつた。

「はゝあ、外はよい月夜になつてるな。」と考へて、そろりと床の上に起き上つた。十分眠りが足りたので、疲勞は完全に身體から拔けてしまつて、未だ若い彼は、四肢に漲る力を覺えた。

「うむ、咽喉が渇いた。水が一杯飲みたいものだ。」と呟いて、樋宮は歩き出した。成可く家人の熟睡を防げまいと祕かに戸口に歩いた。家の中の案内はよく分らなかつたが、圍爐裏のある部屋

まで兎に角行つて見ようと思つた。小さい窓ながらそこからはいる月光で室内は仄明るかつた。

　なるべく足音をたてないやうに、注意しながら爐端まで來た。戸外を窺ふと夕方までの荒天は忘れたやうな月明になつてゐるらしい。咽喉の渇きを忘れてしまつた樋宮は山中雪夜の雄大なる月明の景に心をひかれ、外に出て見た。外は素破らしい景色だつた。本當にその美しい月下の雪景には、彼は心を奪はれ、恍惚として眺め入つてしまつた。

　皎々たる月が天心に輝く下、眼の届く限り雄大な雪景が展開されてゐる。滿月には未だ二三日間のあるらしい寶鏡の光は、地上に白銀を展べたやうな積雪に映じて雲母の波を躍動させてゐる。遠く近くの山々は、その高低のうねりのまゝに、怪奇な明暗を生じてゐる。綿帽子を被つて膨れ上つた木々は今にも動き出して、雄大な舞臺に亂舞を開始するのではないかと疑はれた。

　しん〳〵たる夜氣が、凍りつきさうな寒氣が、衣服をとほしてひし〳〵と肌膚に迫つて來るのも忘れて、樋宮は曖昧模糊とぼやけて見える彼方にまで眼を馳せつゝ、暫時我を忘れて、眺め入つた。

　しかし迫り來る寒氣を覺えて、一つ大きく嚔をしてやつと氣がついた。霏々と降り積つた綿雪は、冴えかへる月光の下、夜の寒氣のため、表面は細々たる粉雪と化して居た。微細な粒子と變じて雲母の如く月光に眩く光る雪を見ると、樋宮は思はず手で掬つた。そして雪の細粉を舌端に觸れ

させようとした、その刹那彼はぱつとそれを放してしまつた。

「儂は何といふ人間だらう。又しても同じ誓ひを二度までも破らうとした。家に入りさへすれば直ぐある水を……。何たる所行を犯さうとする端たなさ——」彼は獨語しつゝ家の方に踵をめぐらした。

　物音一つせぬ寂たる屋内、月光に馴れた目にはいやに暗く、靜まりかへつた中で家人は依然熟睡を續けてゐることだらう。足音忍ばせて、お勝手と思はれる奥の方へ水を索めて進んで行つた。お勝手は案外分り易かつた。山のどこからか引いて來てゐる水であらう、筧からは水晶のやうな水が、窓紙の破れを洩れる月光の中に、仄かな煙さへ見せて流れおちてゐた。柄杓に水を吸んだ樋宮は、一口二口と美味しさうに咽喉を鳴らして飲んだ。

　柄杓をおかうとした途端、ふと人聲が耳に入つた。

「はてな？」と柄杓をかへすのも忘れて、ぢつと樋宮は耳傾けてゐた。すると聞える。賑やかな笑ひ聲やがや〳〵話すかなり多勢らしい人聲が。

「今時刻しかも山中の一軒家ぢやないか。何事があるのだらう。誰かな？」と人聲に暫時耳を澄ました樋宮の胸中むら〳〵と好奇心が頭を擡げた。そろり〳〵、足許に氣を配り注意深く、手搜り

みたいな恰好で聲を頼りに人聲の聞えて來る方向に近づいて行つた。何處をどう通つたのか途中がどんなだつたか、そんなことを顧みる餘裕は一切なかつた。

賑やかな人聲が一室から洩れてゐた。一層足音を忍ばせた樋宮は、その隣室にそつと忍んで窺つた。と微かな穴が强い光の矢を暗に射てゐるのに氣附いた。樋宮はそつと隣室との境界に進み寄つた。するとそれは重く厚さうな板戸の隙間を通る光だつた。

全身の注意を隻眼に集めて彼は隣室を覗いてぎよつとした。

「げえつ！」危く聲を立てようとしたが、辛くも聲を呑んでそれによく堪へた。流石長年の武士生活の結果だつた。

部屋のなかに、煌々と晝を欺く燈火があつた。そして床の上には首が五つ六つころがつてゐた。しかし彼の驚いたのはそんな首ではなかつた。その五つ六つの首がごろ〳〵轉げ廻つてゐたからだ。

樋宮は完全に武士としての落着と嗜みを取り戻してしまつた。最早怖れはしなかつた。もつとよくその場の有様を見極めようと思つて、ぢつと固唾を呑んで隻眼に全精神を打ち込んだ。

數へて見ると、首の數はみんなで六個ある。笑ひ聲話し聲はみなそれらの首の口から發せられてゐる。首は口々に喋つたり笑つたり、轉つたり跳ねたり飛び上つたりしてゐた。しかし何處にも血

一滴室內に流れてゐない。改めてよく注視すると、何とまあ不思議なことだらう。首の切口は實に、すべ〳〵滑かだつた。例へて言ふと時期が來て、枝から脫落した木の葉の柄の元に似てゐる。

「うーむ。」と樋宮は心中に唸りながら眼も放たず一心に見入つた。首は間斷なしに、それこそ目廻ぐるしい程活潑に動き廻つてゐる。樋宮は食ひ入るやうに眺め入つた。仔細に見れば、男の首も女の首もあつた。老人も若い人もゐたのだ。

ごろ〳〵、ごろ〳〵それは目苦しい程動き續ける首を見てゐるうちに、その中の首に見覺えのある顏が三つあるのに樋宮は氣がついた。一つは男の首で今宵の宿の主人の顏に違ひなかつた。あとの二つは女の首で、老いた方のは矢張り、今宵夕飯の給仕をして吳れたこの家の主婦の顏に相違ない。がもう一つの若い女は、頭の中にあるのだけれども、どうしても胸に浮んで來ない。誰だつたらう確かに見たことのある顏なんだけど、記憶になか〳〵上つて來なかつた。そのうちに、やつと思ひ出すことが出來た。

「あつさうだ！元うちにゐたあの女中だ。うむ、それに間違ひない――だけど、何だか變だなあ。三條在の者だとか言つたのに、こんなところにゐるなんて……。」と考へてゐるうちに、あの女中のことが胸に浮んだ。睡眠中よく首を紛失して怪しまれたことが。

「う、む。さうすると彼奴らは……人間ぢやなかつたのか。ふうむ。」樋宮には思ひ當ることがあつた。

何時何處でどうして誰から聞いた話だつたか、乃至は物の本で見たのかはつきりしなかつたが、此の世の中には轆轤首といふものがあるといふ。正に此奴らはその轆轤首に違ひないのだ。がさて轆轤首に見込まれたら、免れる方法は先づないといつてよい。しかし、その怪物どもの首がその體から離れてゐるうちに、ちつとでもそいつの體の位置を動かしてさへしまへば、そいつらはもう絶對首を體にくつゝけて元の身體にはかへることが出來ない――とかいふことだ。

「よしつ！我が身の危險を免れるため、先づ彼奴らの體の在り處を發見しなければならぬ。」と決心した樋宮は首どもに悟られぬよう、そつと戸際を離れるべく後退りを始めた。やつと部屋から離れることが出來た。彼は大急ぎで家中を手當り次第に隈なく捜索して行くと、あつた。しかも首のない體がちやんと六個揃つて一室の蒲團の中に横たはつてゐた。一個づゝ、蒲團の外に引きづり出してしまつた。ふと窓をあけて、外を見ると、そこは崖の上になつてゐたので、樋宮は、占めたつと叫んだ。そして、づる／＼と首なしの體を引きづゝて行つては、窓からその首なしの體を雪の崖下に投げ込んでしまつた。白雪の堆い崖下の谷底は月の光もとゞかぬため、暗く蔭になつてゐた。

六個を全部投げ込んでしまふと、樋宮は再びもとの隣室に引き返して行つた。

樋宮が覗いてゐると、首どもは自分たちにとつて致命的な事態の出來したことも知らぬが佛、依然として燥ぎ續けて騷いでゐた。

と突然一個の首が空中に舞ひ上つた。主人の首だつた。部屋の空中を、ぐる／＼ぐる／＼主人の首が旋回し始めた。

「あゝお前たちみんな嬉しさうだな。待て／＼。もう少しだ。そしたらあの太つて美味しさうな巡禮の體を思ふ存分しやぶらせてやるぞ。わつはつはゝゝゝ」と空中で主人の首が大口開いて笑つた。笑ひながら、ぐる／＼ぐる／＼旋回を續ける。すると下の床上に殘つた五個の首は、空中の主人の首を中央に圓陣を作つて、これも亦、ごろ／＼ごろ／＼床の上を回轉しつゝ旋回し始めた。そして如何にも愉快で堪らぬといふ風で

「わつはつはゝゝゝ」と笑ふ主人の聲について、

「あつはつはゝゝゝ」と五つの首が大口開いて揃つて笑ふ。

それは誠に身の毛もよだつやうな怪奇極りない光景だつた。

稍々暫くこの遊戯にうち興じてゐるうちに、突然主人の首が笑ふのを止めて、しかし旋回飛行

は續けながら、床上に運動し續ける五つの首に向つて言つた。

「おいつ！もう大概いゝ時分だ。巡禮奴どうしてゐるか、誰か行つて見て來い。」

これを聞くと一つの首が、床の上に飛び上りながら、こつくり〳〵をしたかと思ふと突如空中に舞ひ上つて室外に出た。

樋宮は慌てゝ入口の壁際に身を隱した。

隣室では、再び上下五個の首が賑やかに運動を始めた。お菓子を取りに行つた母のかへりを待つ子供のやうに、嬉しさと樂しさの期待に滿ち溢れたやうな調子で……。頻りに舌舐りをしてゐる奴さへゐる。

見に行つて何を見て來ようといふのだらう。

見に行つた首が歸つて來たら、どうしようといふのだらう。

自分の寢姿のないことを知つたら彼らは一體どうするだらう。

こんな疑問をいだいて樋宮は、此の部屋にゐる自分の存在を彼らに悟られまいと一心に注意しながら、隣室の光景と首の戻つて來るのとの兩方に氣を配つてゐた。

すると間もなく見に行つた首がすうつと空中を飛んで歸つて來た。室內の燈火に照されたその首

の顏色は見違へる程蒼白め、眼は血走つてゐた。首は部屋の入り口から悲痛絶望の聲をふり絞つて叫んだ。「大將つ！ゐないつ。大變だつ。我々の體まで何處かへなくなつてしまつてゐるつ！」喚くやうに言ひ終ると、すつかり意氣悄沈の極か乃至は絶望の果てか、どしんつと音立てゝ床に落ちたまゝ使に行つて來た首は動かなくなつてしまつた。

部屋に殘つてゐた四個の首も、これを見ると、見る〳〵顏色が變つてしまつた。今までの元氣も何處へやら忽ち死んだものゝやうに目を瞑るとそのまゝ動かなくなつてしまつた。

しかし、大將と呼ばれた例の主人の首だけは依然旋回を續けてゐたが、床の光景を見下すと忽ち物凄い忿怒の形相を示した。眼をくわあつと怖しさうに見開くと、ばりばりばりつと齒を食ひ鳴らし、

「えいつ小癪な巡禮奴がつ。折角此處まで巧〳〵誘き寄せたのに覺られてしまつたか。未だ遠くまで逃げはしまい。己れ其の儘にしておくものかつ！」と怒鳴るや、最後の奮闘とばかり、室內の空氣を激しく振動させて旋回し出した。身體を失つてはもうおしまひと執念深くも暴れ出したのだ。

ぶうんぶん、ぶうんぶん、唸りを生じ風を切つて、樋宮の行方をつきとめようと、眦まで裂けた爛々炬火の如き眼を血走らせて室外に飛んだ。

身の毛もよだつやうな恐しい形相に、流石豪膽不敵の樋宮も些か度膽を拔かれて、一瞬身を隱す

理智も失つて、後に瞠若としてしまつた。

室外に飛び出た大將首は忽ち、この心に隙の出た樋宮の體を發見してしまつた。

「おのれ憎つくき巡禮奴、覺悟しろつ！」と襲ひかゝつて來た。巨大な首が、眼光火を吐き口中岩をも嚙み碎かんず勢で、樋宮望んでぶつかつて來た。これを眞正面に受けては堪つたものではない。樋宮は咄嗟の間に身を開くと、本能的に首を避けた。彼の耳の傍すれ〳〵に、首は唸りを立てゝ通り過ぎた。壁につき當らうとして危く輪を描いた首が一瞬向きをかへると再び樋宮めざして齒を嚙んだ時には、彼はすでに心身ともに十分の身構へが出來てゐた。

長年積んだ武士としての修練が今や物を言つた。徒手空拳ながら身を護る術に不足はなかつた。輕く兩脚を開いて、拳を握り、どちらの方からでも敵の攻撃に應じて、忽ち防いで攻勢に轉じ得る態勢にあつた。

「くわあつ！」と面上望んで突進して來る首に空を衝かせておいて、背後に流れようとする首に對して、樋宮は鐵の如き拳の一撃を加へた。しかし首もさるもの、低い唸り聲を立てゝ床すれ〳〵までに墜されたが忽ち天井近くまで舞ひ上ると、更に攻撃の手を弛めなかつた。

今や玉なす汗は淋漓と額に滴り全身熱汗に浸つた樋宮は、執拗に襲つて來る大將首と死闘を續けて、全く他を顧る餘裕などは失せてゐた。山中雪の一軒家に於て眞夜に繰り展げられた死を賭しての苦闘は、いつ果るとも見えなかつた。

しかし、此の間戶外では空模様が變化しつゝあつた。死物狂ひの闘爭を繼續する彼らがこれに氣のつく筈もなかつたが、彼らの闘爭が展開される頃からは天候は全く一變して來た。

皎々たる月はその光を失ひ、木々が風に戰き始めてゐた天候は、今や空一面にひろがつた黑雲は月を全く蔽ひ、暗澹たる空には吹雪の前兆たる風が益々その强さを加へて、木々の雪を落し、積雪を飛散させ始めてゐた。が此の風は愈々强くなつて、彼らの生死を賭しての熱闘激爭の間に、屢々彼らの相衝つ部屋の窓にも襲つて來て、戶もはづれんばかりに搖り動かすのであつた。

と突然一陣の强風が襲つて來た。がたつとばかり强く窓が搖れたかと思ふ一刹那、ばたりつと外れ、同時に物凄く大きい握り拳程もある雹が、ばら〳〵ばらつと室內に舞ひ込んで來た。そしてそれは丁度部屋の入口側の壁を小楯に身構へてゐる樋宮に對して、窓の方向から空に弧を描いて猶も襲ひかゝらうとしてゐる大將首に、處嫌はず、ぽか〳〵ぽかつと勢鋭くぶつかつた。

雹の急襲には流石勇猛不屈な大將首も面喰つて閉口したらしい。樋宮との闘爭で相當以上閉口垂れてゐる處へ、强烈極まる雹の雨を食つては堪らない。一轉再轉更に三轉して首は雹から逃れよう

と藻掻いた。しかし一旦吹き飛ばされた窓からは遠慮會釋もなく雹が降り注いで來る。横轉逆轉又反轉、今や腹背に强敵をもつことになつた大將首は、先づ只管背後の雹から身を避けておいて、次には前の樋宮に當らうと最期の力を振り絞つて、上下前後左右縱横無盡の亂舞を續けて空に孤を描き續ける。

此の天佑に樋宮は驚異の目を瞠つた。

喘々息をきつて大將首は四苦八苦の亂舞を繰り返すけれども、益々盛んになる雹の彈幕をば、どうしても避け得ないで必死の狂態を見せた。

大きく肩に波うたせながら、壁際に立ちつくした樋宮は、火のやうな息を吐きつゝ此の場の有樣に見入つて我を忘れた。

と窓外に異形の人影を發見して彼は體を緊くした。

純白の衣に身を包み、丈なす黑髮は風とは逆に後方に靡かせ、こちらに正面見せたその額には明皎々たる一面の鏡を戴いてゐる。明らかに女性には相違ない。繪に描いた龍宮の乙姬樣を彷彿させる感じの女だつた。女は手にした燃えるやうな赤い布片を前後上下左右にうち振り續けてゐる。緩く弱く早く强く、小さく大きく變化を見せて布片を搖り動かす。異形の女の手にした布片の動きに

つれて、風に乘る大小の雹が强く弱く密に粗に降り注がれて來るのだつた。暗黑の夜と白雪とを背景に、窓枠の中に立つ女は妖しくも亦限りなく美しい姿だつた。闇にも、著きその風姿、女は片頰に微笑さへ湛へて、大將首に雹の巨彈を浴びせ續けてゐる。

あまりの意外さに呆氣にとられた樋宮は、窓外に立つ異形の女と室内に狂亂の旋舞を續ける大將首とを見較べながら、どう判斷してよいか迷つてゐると、急に妖しの美女は手にした燃えるやうに赤い布片を俄かに激しくうち振つた。目にも止らぬ手の振動につれて、今までの雹とは形も硬さも格段の雹が、比較にならぬ峻烈な勢で風に乘つて大將首目がけて注がれた。

と「どしーん」と床を響かせて大將首が墜ちた。最後の止めにも似た大粒の雹のために流石に勇猛且つ執拗な大將首も遂に到頭力がつき果てたらしい。

「ほつ」と太息を洩して樋宮が窓に眼を向けるとひとしく

「私は雪の精です。天地造化の神の命で雪を降らせてゐるものです。しかし此の世に於て誰が、水を化して雪となす尊い神の思召をそも眞に解するものがありませう。今日一度ならず二度まで、あなたの殊勝な心掛を見せられて、私はつく〴〵感心いたしました。今此の魔物を打ち拉いで、些かあなたの心持に報いました。」といふ女の聲が窓外から聞えた。

半身をゆらりと窓から室内に傾けるやうにしながら、女は艶然と笑つてなほも言葉を續ける。

「この六個の首は、これから私が往還の木の枝に晒します。この家も永久に潰してしまひます。あなたは身支度が出來たら、怪我のないやうに、戸外へ―少しでも家から遠く離れたところへ―避けてゐて下さい。もう程なく夜も明けませう。」といふと、女はふつと消えてしまつた。

俄かに轟つといふ響が聞えて來た。それは樋宮を腹の底から搖り動かすやうな響だつた。と思ふ間もなく、未だ明けきらぬ彼方の山頂に上つた雪煙が、白くちらつと見えた。煙は山野を鳴動させて見る／＼走り下つて來た。一度にどつと押し出した雪の一大集團は、猛烈な勢で、樋宮の立つ場所數間先を電光石火と通過した。そして次の瞬間、家を包んでこな／＼もみくちやにしたかと思ふ間もあらず谷底へ落下して行つた。

樋宮は何が何だか一切がまるで夢を見てゐるやうな氣持で、薔薇色美しく匂ひかけた山の彼方を凝視したまゝ其處に立ち盡してゐた。

（附）轆轤首は勿論後に附加された挾雜物である。

支那小説の怪談から得た智識の混入であらう。が、雪に對して越後人が諦觀から信仰へと進んだ徑路を説くものとして見ると面白いものに考へられる。

九、吹雪の鳴場所

「あつ聞える。うゝむ。」强烈な吹雪を衝いて雪道を辿つてゐた人影が、暮れかゝる道に佇んでかう呟いた。

横なぐりに雪を含んで吹く風、煽りをくつて飛散する積雪。上下前後左右に渦卷く吹雪は濃霧の如く一寸先の見透しもきかぬ。吹雪の猛威に脅えつゝ、咆哮の合ひ間に耳傾けてぢつと何かに聽き入つてゐた人影はやがて再び歩き出した。

天地滿目唯灰一色に塗り潰されて來る日も去る日も、全世界が今にも壞滅するかと思ふ吹雪の悲鳴に滿される頃ともなると、峠の頂上に於て何處からともなく聞えて來る。

「えいつ殘念！宿願の母の仇、謀られて此處に空しく相果てねばならぬか。」といふ血を吐くやうな聲が吹雪の咆哮にまじつて聞えて來ると傳へられてゐる。

山棲みの山樵でさへも稀にしか聞くことの出來ない、怨みに燃ゆる闇の悲鳴、これには次のやうな雪の一夜の哀話が傳へられてゐる。

時代は何時の頃か分らぬが、昔のこと、或る年の暮れのことであつた。土地者とは見えぬ母子二人連の旅馴れぬらしい人が雪沓に足をかためて山道を歩いてゐた。服裝賤しからぬ母は人品も亦優雅だつた。漸く疲勞しかけた息子は前髪立の少年で、元服までには未だ二三年はあるらしく、雪の深くなつた道を母に勵まされながら急いでゐた。

「馴れぬ旅では峠を越さぬうちに夜になりますから……。」と親切に言つて呉れた茶店の人々の忠告をおしきつた母子が片貝を出發したのは、雪のちらほら舞ふ日の晝下りだつた。

「柏崎へ一日も早く……さうしては居れぬ。」何の用かは知らぬが、只管道中を急ぐ母子は、裏無峠を越え澁海川を渉つて岩田から柏崎へと志すのだつた。母子が峠にかゝる頃から灰色の空は一層低く暗くなつて來て、頂上までの半分距離も歩かぬうちに雪が酷く降り出して來た。數歩前は雪のために厚く閉されてしまつた。喘ぎ／＼上る坂道は雪が深かつた。横なぐりに來る吹雪と迫る寒氣、それに歩く道の困難は更に酷くなつた。峠の頂上から吹き下して來る風は母子を背後に押し戻さうとさへする。母子は幾度か行き惱んだ。せめて夜の來る前に頂上まで行き著きたいといふ焦燥に驅られる母子は、早くも夜の迫りつゝあるのを感じて稍ゝ絶望的になつた。此の荒天ではとても峠を越えることは覺束ないと諦めた。よく勝手を知り地理を辨へた土地の人々でさへ、かうした

荒天の日には吹雪のために道を失つて谷底に墜落することが稀でないといふ。それでは（せめて頂上まで）もうこれ以上の難澁を突破出來ないと知つて、母子はかう念願して道のけじめもつかぬ道を進んだ。

やつとの事で頂上に著くことが出來た。やれ嬉しや、せめて此の上は吹雪を凌ぐ木蔭でもあつたらと稍ゝ開けた吹雪に煙る頂上を彼方此方と望み見た。此の時母子の眼に映じたのは程遠からぬ木蔭にちら／＼する火影であつた。暮れかゝる闇の中、道も物かは母子は嬉しさに勇氣百倍たゞ一途に一軒の山小屋の火影を目當に雪にまみれて突き進んだ。

母が訪ふ聲に應じて出て來たのはもう六十を越えた老婆だつた。

「先を急ぐ旅の母子が、麓の茶屋の親切を無にして困つて居ります――」と前提した母子の願ひは快く承諾されて、

「それは／＼嘸ぞお困りだらう。穢い處ぢやがお上りなされ。」と老婆は母子を導き入れた。小屋は見かけによらず大きく中もなか／＼立派な住居だつた。大きな圍爐裏に勢よく燃えさかる榾火の傍で、母子は凍えきつた體や痺れて堅くなつた四肢を揉みほぐした。老婆が心づくしの熱い稗の粥を啜りながら戸外に跳梁する白魔の氣配に、もう半時遲くなつたらばと思つて、老婆の親切がなほさ

ら泌々と身にしみた。
食事を終へて焚火の匂ふお湯を呑む頃には信次郎——息子の名はさう呼んだ——はもう座に堪へぬ程眠げな様子だつた。
永遠に降り續け猛り狂ふかと思はれる外の吹雪も知らぬげに、小屋のなかは榾火が明るく暖く燃えて實に氣持がよかつた。しかし何故か、焚火の煙の中に鈍く浮き出て見える壁にかゝつた山刀や弓矢だけが妙に不安なものを母親に覺えさせた。
眠むがる信次郎を伴つた母親は隣室に退いた。しかし床に就いても彼女は懶いやうな退屈なやうなそれでゐて變に苛々した氣分に襲はれて疲れてゐるけれどもなか〳〵眠れなかつた。
すうつ、すうつといふやうな忍びやかな物音で母親はふと眼醒めた。眞夜中らしく外に咆哮する吹雪以外は物音一つせぬ夜の靜寂を微かに破つて聞える規則的な斷續音。彼女は俄かに胸騷がしさを感じて床の上に起き直つた。そして思はず我が子の方を窺つた。けれども枕を並べて寢てゐる我が子の顔は眞暗闇で見えなかつた。が安らかな熟睡の寢息だけが聞えてゐる。彼女は手搜りで物音に近づいて行つた。壁に竝んだ數々の武器が闇に浮かんで見えたやうな氣がした。

勝手の分らぬ初めての家の眞夜中、それがどの部屋か見當もつかなかつたけれども、何とも判斷のつかぬ物音をたよりに先づ隣室を覗いた。するとそこは爐のある部屋だつた。もう焚火はすつかり消えてゐたが、殘り火の餘光で周圍はほの明るかつた。暫時瞳を凝らした彼女は「あつ！」と思はず聲を洩さうとして辛くも袖で口を被つた。意外な光景が闇に浮いてゐた。爐端には見るからに恐しげな面相をした屈強な男が二人胡坐をくんで、老婆の研ぐ刀が砥石の上を動くのをぢつと無言で眺めてゐた。獸の皮らしい胴着を着けた髯男の異様な風體は、眞夜刀のねた刄を合はせる老婆の所作と共に纖弱い女子供を顫へ上らせるに足るだけの雰圍氣を一杯に醸し出してゐた。磨き上つたか老婆が山刀をぢつと爐の火にすかして見た時、ぎらりつと爐の火を吸つて射返す刀の物凄い光を見て、彼女は身に迫る危險を直覺した。
「直ぐ逃げなくちや危いつ。」と急いで信次郎の方に近づいて行かうとした彼女は物に躓いてばつたり倒れてしまつた。慌てゝ自分の裾を自分で踏んだのだつた。
ばたりつと、彼女の倒れた音は、隣室で一心に刀を研いでゐた老婆及び二人の荒くれ男の注意を呼んだ。ぴたりつと刀研ぐ手を老婆が止めたのと二人の男が彼女母子のゐる部屋の方をぐつと睨んだのと同時だつた。

「殺つてしまへつ、感づきやがつた。」ぴかりと眼を光らして一人の男が叫ぶや否や三人の男女はもう起ち上つてゐた。

「殺されては大變だつ。」と彼女は直ぐ跳ね起きて我が子信次郎の方へ行かうとしたが暗と焦慮が纔かの距離を歩かうとする彼女の行動を妨げた。

此の間、早くも殺到した三人は、がらり戸を開けると等しくざくと一太刀彼女の肩に浴びせてしまつた。

我が子助けたさの一念、彼女はよく眠つてゐる信次郎に對つて、血沫の中からから絶叫した。

「信次郎つ！危いよ。殺される……早く逃げなさい。窓、窓から……と、飛べ……外へ窓から飛べ……」肩先に火のやうな衝撃を蒙りながらも一瞬叫んだまゝ彼女は俯伏してしまつた。

はつと目醒めた信次郎は、何を考へる隙もなく唯本能的に母の聲と共に窓から戸外へ反射的に逃れた。後に迫つた男の白刄にちらつと一瞥を投げた次の瞬間、彼の身體は戸外の雪に肩まで埋つて身を藻掻いてゐた。

「汝つ！外へ飛びやがつた。」

「逃がしちやならん、殺してしまへつ。」

「松火を！早く外へ出て見ろ。」三人の男女が口汚なく罵りながら火をともし、樏をつけてゐる隙に信次郎は小屋の壁沿ひに雪の中から脱して走つた。盲滅法に……。

外は眞の闇、吹きつける風と雪は皮膚に錐を揉まれるやうだつた。しかし素足の信次郎は何とも感じなかつた。ふはりつと雪の中から抜け出た信次郎は、小屋の軒先まで來た時、闇の空に浮んだ母の顔に導かれて一目散に闇の雪道を走つた。不思議も奇蹟も覺えなかつた。

そして氣のついた時には信次郎は、少なからぬ路用のはいつた財布を手に、ぼんやり柏崎の町はづれに立つてゐる自分自身を發見した。

「母が亡魂のお助けお導きだ。母様この仇きつと晴さずには置きませぬ。」きつと口を結んだ少年信次郎は昂然と眉を上げると町の方へ歩き出して行つた。

裏無峠の頂上、雪の山小屋に起つた眞夜の慘事は誰知らぬまゝ早くも十年の月日が流れた。雪は毎年降つては消えた。そして今年も赤白魔跳梁の冬となつた。

或る日のこと未だ年若い立派な武士が、間もなく近づく夕方めがけて、片貝の方から降り積む雪を踏みしめ踏みしめ、急ぎ足に裏無峠を上つて來た。筋骨逞しい青年武士は足腰へも嚴重に元氣な足取りだつた。峠の頂上に達した頃には、雪は深く闇も濃くもう一歩も進めぬ位だつた。峠の頂

上に立つた武士は何か心に期するところでもあつてか、頻に雪と闇をすかして四方を物色してゐる。笠の縁にかけた手を、つと下した武士は躊躇なく歩き出した。一點の火影を認めたからである。

膝を沒する雪を蹴立て丶武士は眞直ぐに火影を望んで進んで行く。

火影は雪に埋もれてそれとも見えぬ小屋から洩れてゐるのであつた。玉なす額の汗を手の甲で拂ひ落すやうに拭つた武士は、股から膝から凍りつくやうに附着した雪を、山小屋の土間で拂ひおとすべく、とん／＼とんつと足踏みならし、ばた／＼と音立て丶合羽も拂つた。

ずうつと入口に進んだ武士は

「雪の山道、行き暮れて難澁いたす。何卒一夜の宿をお頼み申す。」と屋内に聲をかけた。すると戸が開いて一人の老婆の顔が覗いた。老婆は武士の願ひを聞くと、ぢつと若い武士の顔を見詰めながら、何かから遠い記憶をでも思ひ起さうとするかの樣子を示したが、次に默つて首肯いた。

爐端に案内された武士は言葉少に屋内の樣子をしげ／＼と眺めながら煖をとつてゐた。

この武士こそは十年前、この小屋から吹雪を衝いて九死に一生を得た少年信次郎の逞しくも成長した姿であつた。母の亡魂に導かれて奇しくも危い凶刄を免れた彼は、一路都へ上つてよい師匠の下で只管武術修業に十年間專念した。母の安執を晴らさうと寢食を忘れて勵んだその苦しい修練の甲斐あつて、今や師匠にすら滅多にひけをとらぬ腕前と見事なりをうせた。かくては最早矢も楯も堪らぬ彼は師の許しを得て欣然復仇の途に上つた。母の無念を拂すべく日數計へて遙々雪深い冬の越後へと路を急ぎ、今宵母の命日に奇しくも此の小屋に辿り著く事が出來たのであつた。十年間寢た間も忘れぬ不倶戴天の親の仇を討ち取らうと勇んで片貝を出發したのである。辿り來つて見れば總べてが十年前と全く同じだつた。母が修羅の迷妄の一つである仇の片割の老婆死歿の危惧も杞憂に終り既に相當の年齡に達してゐる筈の憎き老婆は額の皺の數まで母が非劫に斃れた夜と寸分の變りがない。そして十年の月日は前髮立ちの少年をかくも立派な若者と化したので老婆の方では夢にもそれと氣附いた風がなかつた。信次郎の心は躍つた。しかし壁の染やら、そこにかけられてゐる武器獵具などを見れば昔が思ひ出されて流石暗澹たるものがあつた。がそれは信次郎の勇氣を鼓舞しこそすれ毫も心を鈍らせはしなかつた。無量の感慨に驅られる信次郎はしかし未だ若かつた。平氣を裝つても言葉の節々や態度物腰にぎこちないもの丶現はれるのをどうすることも出來なかつた。

粗末な夜食が濟むと爐端で、老婆と一つ二つ何氣ない雜談を交した信次郎は、臥床の催促をしながら言つた。

「馴れぬ雪道に持病の癪氣を覺え申した。今少し煖つたらやすませて貰ふ程に、無躾ながら臥床

をお願ひ申す……いやこれはどうも我ながら粗忽千萬、唯さへ冷えるのに折角お宿を願ひながら胴卷も取らず……どりやこれをとつて悠つくり煖まつてからやすませて頂くとしよう――」故意か不注意か、かう言ひながら信次郎は老婆の怪しく光る眼を明瞭と感じつゝ帶を解く〳〵と膨んだ胴卷を引ずり出して傍においたまゝ目を瞑つて爐に手を翳し腹を煖めるのであつた。

「やれ〳〵骨の髓までしみこんだ寒さも、お蔭でどうやら拔け申した。どりや、やすませて頂くとしよう。」

「悠くりお寢みなされ。お寒くないやうに碌なものではござらんが、どつさりある程に夜具は御自由におつかひなされや。」

「忝けない。しからば御免つ。」

「もし〳〵お武士さん。それ〳〵大事なもの――胴卷をお忘れぢや。」

「いやこれはどうも……。我ながら疲勞のため些か心が緩み申した。はつはゝゝあ。」

案内された部屋は十年前の悲しき思出のその部屋だ。床さへもがあの晩その儘にのべられてゐる。信次郎は床についたが、眠られようばこそ。かねて心に十分期するところがあつたが、心に油斷なく眞夜中を待つた。あの男共二人の現はれるのを待つて三人揃へて首を打ち落すのだ。

武士は轡の音にも目を醒ます。まして大望ある身に寢たとて忘れぬあの刀の刄を磨ぐ音。信次郎は、ぱつと目が醒めた。眠るまいとはしながらも、疲勞のため何時しかとろ〳〵と眠つてしまつてゐたらしい。

ぢつと耳を欹てると隣室から聞えて來る、すうつ、すうつといふ刀を磨く音。愈々時機到來、十年間の遺恨を晴らすは正に本夜である。すつくと信次郎は床の上に起き直つた。手早く身支度を整へると刀の目釘を濕した。砥石の音を手頼りにそろりつと隣室へ近寄つた。闇の中足音忍ばせて聽耳立てゝ隣室を伺つた。ゐるつ。熊の毛皮の胴服纏つた二人の男が凄い眼を光らして爐端に胡坐かいて待機してゐる。爐の火に顏の半面を照された老婆が砥石で刀を磨ぐさまは正に鬼氣人に迫るものがあつた。

暫時して老婆は磨ぎ上つたらしい刀を爐の火に翳して、切味でも試すつもりか拇指の腹ですうつと刀の刄を撫でにやりと笑つた。白髮の亂れる額には今にもにゆつと角でも生え出しはしまいかと見えた。更に刀の刄を鬢にひきあてゝ二人の男と顏を見合はせて、老婆が身の毛もよだつ無言の笑ひを洩すと、もう信次郎は我慢が出來なくなつた。

さつと境の戸を勢よくひきあけた。途端に三人の視線が一齊に信次郎に注がれた。もう矢も楯も堪らず、すらりと一刀の鞘を拂つた信次郎は、

「汝等よく承れつ。我こそは十年前の今月今日敢へなくも汝等の凶刃に倒れた母の子であるぞ。母の無念を晴らさうと今宵此處に廻り來れば、相も變らぬ鬼畜の如き惡事三昧、天に代つて母の仇ともぐ\誅して吳れる。覺悟いたせつ。」と一氣に言つて、刀の柄を握りしめて、ずいつと一歩部屋に踏み込んだ。

「奴つ、生意氣な――道理でどこかに見覺えのある顏だと思つたわい。小童と思つて長追ひせずに見逃してやつたに、洒落臭え。そらつ、手前ら拔かるなつ!」一寸機先を制されて沈默してゐる男二人にかはつて老婆がから叫ぶと等しく今磨ぎ上つたばかりの山刀を逆手に膝を立てかけるや、信次郎は面上必殺の氣を漲らしつゝ三人に肉迫して行つた。老婆の聲に

「合點だつ。」

「たゝんでしまへつ。」男二人も壁の山刀とるより早く拔き連れて立ち上つた。

一瞬狹い室內が息詰るやうな緊張で滿された。が次の刹那には早くも靜寂が破れた。十年鍊磨、母の復讐に燃える信次郎の鋒先は鋭かつた。氣の強い老婆も二ところ三ところ既に薄傷を蒙つた。

二人の男も壁際まで追ひつめられた。一歩踏み出すと等しく、信次郎の剛劍が爐の火を吸つて颯とばかり振り下された。血煙立てゝ男の一人が醜く土間の莚に匍はうした間一髮、信次郎の體は、突然ざゝゝあつと顚落してしまつた。

勝利の一歩手前で彼は敢へなくも敵の陷穽に落ちてしまつたのだ。はつと思ふと忽ち態勢を整へた信次郎は反射的に坑の底につつ立つた。周章ては不可ないと思つた信次郎は徐ろに坑の周圍を眺めた。手掛り一つない切り立てた土坑である。萬事休す矣。

上の方では老婆が咄嗟の機轉に歡聲を上げる男共の濁み聲が聞えた。と、やがて彼らは坑の中に深々と燃えさしを突つこんで底の方を照しながら

「ざま見やがれつ!」と信次郎に嘲笑を浴つて自分らの優越を誇つた。

坑の深さは二丈もある。周圍に手をかけて上らうとすれば、ぼろ〱と土が缺けておちてしまふ。施すに策がない。無念の齒をくひしばる信次郎を蔑りつゝ坑の口はやがて塞がれてしまつた。

眞暗な坑の中では夜も晝もない。幾日經つたことやら、迫り來る飢餓のために信次郎は漸次衰弱して行つた。冷たい土坑の底に端坐した信次郎は閉ぢ込められた坑の底から逃れる術もなく、

「殘念だつ。十年の修業も水の泡、母の無念を晴す術もなく空しく彼等の計略に斃れねばならぬ

かつ。」と血を吐くやうな悲しい叫びを續けながら、あはれや遂に死んでしまつた。

死んでも死にきれぬ遺恨を殘して信次郎が此の世を去つてから二日目の眞夜中、此の小屋はどうしたことか突然火を發し歡喜と勝利の濁酒に醉ひ痴れた小屋の人々は眞夜のことではあり熟睡してゐて火には全然氣がつかなかつた。吹雪の夜空を眞赤に染めた小屋の火事は山中の事とて誰知らぬまゝに一物も殘さず小屋を丸燒きにしたゞけで鎭火した。

周圍を深々と雪に圍まれた小屋の燒跡には三個の燒死體が發見されたが、それは男女の別も年齡も判らぬ全く白骨と化したものだつた。しかし土坑の奥深く祕められた死屍については誰一人知る人もなくて濟んだ。

この事あつて以來再び其處に山小屋は建たないで過ぎたけれども、吹雪の激しい眞夜中時にはもと小屋のあつた敷地の土中から洩れる、

「殘念だつ。母の仇もとらず空しく相果てねばならぬか。」といふ世にも悲壯な聲が聞えて來ると噂されるに至つた。けれども場所と時が妨げとなつてその聲を聞き得るのは纔かに山棲みの賤山樵に限られてゐて、それも極く稀なる機會に於てのみだといふ。里人は今その場所を呼んで「吹雪の鳴き場所」といつてゐる。

一〇、吸ひ込み橋

昔、岩船の眞野といふ處に一人の武士が住んでゐた。此の人は名を嵐彈正といつて、村上の御家中の一人で祿高五百石番頭役を勤める、殿樣の主立つた家來の一人であつた。身長六尺に餘り、力は十人以上に匹敵する髯男、その上弓の達人として知られてゐるばかりでなく、其の他の武藝に於ても總べて並みすぐれた豪勇の人であつた。のみならず一面文雅の道にも相當の素養を持ち義理人情に厚い、眞に文武兩道を兼ね備へた勇氣のある人格者だつたので全藩の尊敬を集め、殿樣の御覺えも頗るよい人だつた。しかし、如何なる理由からか彼の住居は、村外れの陰森と木の繁つた寂しい森林の中にぽつつりとたつた一軒建つた家に、家族も召使ひもなくたつた一人の鰥暮しをしてゐた。かやうに繫累をもたぬ彈正の勤務振りが衆に擢んでてゐたことは勿論で、朝は早く家を出、夜は遲くまで城に出仕してゐた。たま〳〵の非番には近隣の山野を拔涉して狩獵に體を練り、殆ど家居することは稀だつた。

或る初冬のこと、野山の枯芝の上には二三日前に降つた斑雪が殘つてゐた。此の日朝早くから彈正は例によつて非番を幸ひ山野を歩き廻つた。携へた弓矢は必ずしも獲物が目的ではなかつた。

妻子を持たぬ彈正には晩餐を賑はす必要はなく心身の鍛錬が第一の目的ではあつたけれども、その日はどうしたことか兎一匹にすら回り逢はなかつた。夕陽が沈みかける頃彈正は鮭で名高い三面川に沿うて、ぶらぶら歸途を辿つてゐた。鮭の時期を過ぎてゐるので川縁には人一人見えなかつた。

　夕陽が沈んでしまふと闇の迫ることが早く、川風が冷たく頬や耳に觸れる土堤の枯芝の上に消え殘つた初雪が夕闇に白く浮き上つて來始めた。と急に彈正は步みを止めた。

　黄昏の光の中に視線は定かでないが、ふと二三間先に彼は何やら蠢めく影を發見したのだつた。そこは廣い河原が急に土堤の方に傾いて來て、淺く廣がつてゐた水が、彈正の步いてゐる土堤の下に集つて來て瀨をなしてゐる處だつた。川の縁には處々に柳が生えてゐる。その一株の蔭に黒い影が蹲つてゐる。闇の中に瞳を凝らすこと數呼吸、彈正は一切を領解した

「はゝあ川獺奴、鮭を發見たな。」川獺は彈正に見られてゐるとは夢にも氣附かず、一心に水の底を窺つてゐる。時々前脚を空に泳がして、ぐうつと體を川面に乘り出す。二回三回と同じ所作を繰り返した。

　彈正は闇の堤上に凝然と彫像のやうに突つ立つて川獺の動きに眼を注いで佇んだ。と一瞬夕闇に白く飛沫が上つた。彈正は今日の處女矢を急いで弓につがへた。きり〳〵きりつと引絞つてぴたり

狙ひがついた時に、川獺は獲物を咬へて水面に姿を現はし、河原にぱつと飛び上つて次の動作に移らうとした一刹那滿を持した矢が川獺の鼻先寸前の處に勢よくぶつりと突き立つた。

　不意に飛來した鋭い矢、川獺は獲物を捨てゝざんぶと水底に潛つてしまつた。川獺にとつてこれは殘念極まりないことだつたらう。時候はづれとはいふものゝ産卵のために川を上つて來る鮭は珍しいことではない。自分の十數倍の重量ある鮭を川底に發見し、その素破しい目的物のため心奪はれて背後の人に氣附かなかつたのは自らの不覺にもせよ、待機苦心した折角の獲物を捨てゝ身をもつて脫れねばならなかつたのは、川獺にとつて骨髓に達する遺恨に違ひなかつた

　しかし彈正はほんの惡戯心でやつたに過ぎなかつたのだ。獲物にあぶれて朝から矢一本放たぬ彈正は徒らに無益の殺生を好んでした譯ではなく、單に自己の腕前の程を示して川獺を驚かしたに過ぎなかつたのだが、川獺にとつては肝玉のでんぐりかへる程の恐慌だつたのだ。

　川瀨に響く豪快な笑ひを殘して彈正は立ち去つた。綺麗さつぱり朝からの不快を此の惡戯によつて洗ひ流した彈正はすつかり愉快になつて來た。

「わあはつはゝゝあ」彈正は大聲で再び笑つた。柳の小枝に鰓を通した大きな鮭の腹は卵で膨れ上つて銀鱗が闇にも白々と光つて彈正の手にあつた。

愈々本格的に雪が來た。そして一日增に深くなつて行く。來年の春四月まで再び地面は人々の視界から覆ひ隱されてしまつた譯だ。他國の人にとつてこれは堪へ難いことかも知れぬが、此の土地に生れて育つて生活してゐる人々にとつては、雪のために數多い悲喜劇が繰り返されるにもせよ、寧ろこれがなかつたら生活に張りがないかも知れぬ。

雪は深々と山野を埋め盡してゐた。嵐彈正はその日夜遲くなつて退城して來た。雪は全く降り止んで寒月が淡く輝いてゐた。提灯ももたぬ彈正は月に冴える雪明りの中を森の一軒家へと歩いてゐた。道端の木々は葉のある木もない木も一樣に雪のために膨れ上つて、淡い月光の下しーんと靜まりかへつたまゝ、明暗の差をはつきり見せてゐた。

それらの木々は白無垢を著けたまゝ動き出すかと見えたり、雪の重さに堪へかねてあるかなきかの風に、枝から雪を拂ひ落したり、積雪を拂つたあとの常盤木は人の囁にも似た音をさせたりしてゐた。毎日通ひ馴れた道だ。樋のやうな道を彈正は歩いて行く。彼は胸中で今日城中で行はれ茶の湯の會のことを考へてゐた。今日此の雪景色の中で、好例の茶の湯が盛大に行はれた。君公の茶の湯の奬勵、領内茶栽培のこと、新茶製造の工夫、領民の生活の潤ひ、それからそれへと考へて今更の如く舌に茶の味を思ひ起しながら歩いてゐる。無意識に空の月を仰いで見たり、人通りの少

ない、夜氣の朧な道を透し見たりしながら歩いてゐた。そして丁度立木の少し續いた箇所に來た。此處は臆病な人がよく妖怪變化の出るところだと噂しあふ場所だつた。しかし彈正は（油上げとられたとか、路傍に寢てゐたとかいふ）そんな百姓町人の話などは思ひ出してもゐなかつた。積雪を鳴らしながら、ぐつ、ぐつと大跨に歩いてゐた。

と、彈正は背後に自分の足音でない足音を耳にした。ぐうつ、ぐうつ、すうつ、すうつといふ物音は、踵の切れかゝつた藁沓で雪の上を歩く音だ。彈正は振り向かないでも明らかに物音を判斷することが出來た。彼は、

「誰かな?」と何氣なしに後をひよいと振り向いた。するとそれは子供だつた。とても可愛いゝ子供が彼の背後を歩いてゐた。月が後方からさしてゐるので顏は陰になつてよく分らなかつたが、色白の未だ十才前後の男の子だつた。

「これ〳〵子供。」と彈正は呼びかけた。此の夜中に子供の一人歩きは少し妙だ、殊にこんな人通りのない處で――と思つて彈正はかう呼びかけたのだつた。すると彈正が言葉をかけたるや否や、その子供の姿はぱつと消えてしまつた。

「はて?變だぞ。」と急に見えなくなつた子供の行方を捜してゐると、立木の中の一際大きい柳の古木が、かさ〳〵かさつと鳴つた。そして風もないのに、未だ未練がましく枝についてゐた柳の枯葉が、はらはらと白い雪の山に點々と月光を浴びて銀蛾の如く四五枚舞ひ下りた。又さは〳〵と柳の木が搖れた。子供は姿を隱した限り出て來ない。彈正は

「つまらないことに時間を潰したわい。」と呟いて再び歩き出した。とこれは何事ぞ。最前姿を隱した筈の子供が又自分の背後から來る。つい二三間後の月光の中に、解けかゝつた藁沓で雪をすつてゐるのは紛れもない最前の子供だ。

「こいつなか〳〵面白くなつて來たぞ。」と彈正は思はず足を速めて歩いた。肩越しに首捩ぢ向けて後を見ると、矢張りゐる。先刻と間隔は少しも變つてゐない。くるりと彈正は後を振り向くが早いか今度は逆に子供を追ひ掛けた途端、ぴしりつと激しい音がした。はつと音のした方を見た。柳の古木が折れたのだつた。と子供がゐない。きよろ〳〵つと四邊を見廻した。ゐない。あきらめて彈正は再び我が家の方へ歩き出した。と、どうだ。朧に霞んだ夜氣の中、自分の前方に子供が歩いてゐるではないか。

「なあんだ。さては矢張り噂の通り惡戯者が出るのだな。儂とも知らず大それた奴だ。」彈正はぐん〳〵足を速めた。心中、

「今度こそ逃しはせんぞ。屹度尻尾をつかんで見せる！」と歩幅をひらいた。が、子供の足はなか〳〵速い。幾ら頑張つても距離は縮まらぬ。道は晝間人の歩いた跡が夜氣のため氷つてつる〳〵月光に光つてゐる。餘り足を急がした彈正は不覺にもつるりつと滑つて倒れさうになつた。危く體勢をとゝのへて辛くも踏み止つた。その途端前を歩いてゐた子供はくるりつと後向きになつて立ち止つたが、あつ、見よその顏を。月光の中に見えた子供の顏は、目なし鼻なし口もない、唯鷄卵のむきみのやうに眞白の、のつぺらぼうだつた。

「己れ、變化…待ていつ。」と心中に叫んだ彈正は刀の柄に左手をかけると脱兎の如き勢で子供の後を追つて走り出した。すると子供も走り出した。とても早い。煙かなんぞのやうにすうつと走る。頬が耳が夜氣に痛い。彈正は本氣になつて走つた。が子供との距離を一寸だつて縮めることは出來なかつた。熱い息をふうつと吐いた彈正は悠々と歩き出した。あんまり大人氣ないやうな氣がしたのだ。と、子供もぶら〳〵と行く。彈正が走れば子供も走る。歩けば歩く。全く彈正はからかはれてゐるやうな氣がして忌々しかつた。がどうにもならぬ。

その中に彈正の住居が間近になつた。森の入口に來た。入口には川が流れて丸木の一本橋が懸つてゐる。子供は丸木橋の中央に突つ立つて月を仰いだ。と、そののつぺらぼうの顏一杯の口が俄かに開いたと思ふと

「わあつはつはつはあ。」と途方もない大聲上げて笑ふと、ぽちやりつと川の中に消えた。我にもなく驅け寄つて行つた彈正は川の中を覗きこまうとしたその途端、誰かに弱腰ぐいつと一つ押された。踏み怺へるには足場が滑る。つるつるつるつと滑つたかと思ふと、ぢやぶうんと川の中に墜落尻もちついてしまつた。

川は淺い。何の怪我もない。しかし此の夜寒に川の中に尻もちついては堪つたものではない。彈正は全身濡鼠となつてしまつた。誰一人見てゐるものがなかつたにせよ、隨分體裁の悪い話だつた。威全藩を壓する彈正の自尊心は著しく傷つけられた。ぶる〳〵身顫へしながら、やつと彈正が川岸に匍ひ上つて見ると、月光燦々と降りそゝぐ向ふ側に大きな川獺が黑々と雪の上に蹲つて、如何にも人を馬鹿にしたやうな顏で彈正の顏を見詰めてゐたが、次いで再び川の中に姿をかくした。

「畜生つ。やりやがつたな！」と叫んだ彈正の胸には此の時過ぐる初冬の黃昏獲物を奪はれた川獺の姿が、まざ〳〵と思ひ起された。

其の後彈正は何故か、城内に住居を移した。が彼の威望と恪勤は相變らずだつた。

最初の程は理由を知らぬ人々は彈正突然の轉居を頗る怪んだ。がその中に誰いふとなく川獺の返報、彈正遭難の眞相が傳つて、人々は惡意のない微笑を交し合ふのであつた。

彈正遭難の場所はそれから「つる〳〵橋」とか「吸ひ込み橋」とか人々に呼ばれ出した。冬季其處を通る人は三人の中一人は必ず足奪はれて川に落ち込むのが常であつたが、しかしそのために生命に別狀のあつたためしは未だ嘗てない。――といふ。

これに就いて人々は彈正の武勇よく川獺を驚かしたが、その生命まで奪はなかつたからだと傳へてゐる。

（附）此の種傳說の巷間に語られてゐるものも隨分多い。話の中核をなしてゐるのは、何れも雪である。積雪が踏み固められると雪の中に含まれてゐた水分が上表に游離浸出し、これが寒氣のため氷化して頗る滑らかになる。人々がこれに足踏み外して屢々奇禍を招くのは雪國では珍しいことでない。これを狐狸などが復讐に利用するのだと信じて語られるのである。越後では狐狸よりも川獺や狢が多いやうだ。雪の表面が氷化したのは土地によつて「きんこ」「きんこう」「ぎつこ」「ぎろ」「かれ」「ざら」「ぎら」など方言でいろ〳〵ちがつてゐる。

一一、雪和尙

「わたくしの祖母は越後頸城の生れでして、この話は生前祖母がよく聽かせて吳れたものでした。ですから所々曖昧な節のあるのは幼い時炬燵で半分眠りながら冬の夜聽いたからです。その點は何卒御容赦下さい。」から冐頭して氷川冬子さんが語つて吳れたのが次の話である。

――この話は大人になつてから考へて見ますと、茨城縣筑波山麓、小高村石崎とかいふ村に傳はるあの有名な頭白上人傳說――臨月の女が追剝のため殺害され、葬られてから土中で分娩し、斷ち難い母性愛から亡魂が女中の姿となつて夜々團子を買ひに五年間通ひ續けて我が子を育んだといふ怪奇譚――と同巧異曲の嫌ひがないでもないと、實は感じてゐるのですけど、又一面如何にも越後の國雪の傳說としての特徵を持つてゐるやうにも思はれますのでお話するのですから、何卒そのおつもりでお聞き下さいませ。

祖母の生れた村に與助といふ男が住んでゐました。もうかれこれ分別盛りのいゝ年齡でしたけど、

飴屋を稼業として、處々方々のお祭や緣日などには随分遠方までも出かけて行つたし、近在の村をば子供相手に飴を賣り歩いてゐる男でしたから、未だに無妻で、他に家族といふものもない至つて呑氣な境涯にある男でした。けれども冬になると祭禮も緣日も少くなるし、雪の降る時には出掛けるのも億劫なので、專ら村外れの獨り住居で買ひに來る人だけに飴を賣つて座食してゐました。

ところが或る晩のことでした。朝からやみくも降つてゐる猛烈な雪のため、その日はお客が一人もなかつたので一しきり爐端で煖をとつてから寢すまうと思つて潛戸の棧を下しに行くとその時とん／＼と板戸を敲く音がしました。續いて、

「今晩は―お疲れさまです。」といふ聲が細々と聞えましたので、與助はがらりと戸を開けて

「へえ―今晩は。」と顔を覗かせました。

「大變遲くなつて濟みませんけど、飴をいたゞかせて貰へませんでせうか。」

「へえ／＼飴でございますか。―毎度ありがたう存じます。」と與助はかういひながら飴箱から飴をとつて笹の葉にくるむと手馴れた手つきでくる／＼つと藁で結へて渡しました。客は女の人でした。蒼白い顔には二筋三筋後れ髮が風に嬲られてゐました。

「さて？見かけない顔だが―」呟きながら女から受け取つた一文錢を何心なく掌の中に眺めて、嫌な氣持になりました。それは何とも形容の出來ない嫌な臭がむう－んとしたからです。與助はぴしやりと板戸を閉め切つて棧を落し、錢は賣上金入の笊にぽうんつと放り込んだまゝ寢に就きました。

來る日も來る日も雪が續きました。時としては一日中朝から一人のお客のない日も珍しくありませんでした。隨つて賣上金も數へる程しかありません。或る晩與助は夕食後爐端に胡坐を組んで賣上の一文錢の穴に緡を通して勘定して見ようと、幾日振りかで棚の錢笊を取り下しました。すると又ぷうんと嫌な臭ひが漂ひました。與助は忘れるともなく忘れてゐたことを思ひ出しました。それはあの夜以來毎晩、それも決つて遲くなつてからあの女が飴買ひに來ないといふ日のないことでした。一人もお客のない日にも彼女だけは必ず夜遲くなつて姿を見せました。例のやうに蒼白な顔には鬢の毛がほつれかゝつて風に搖れてゐました。決つて一文錢―變な惡臭の漂ふ―を一枚置いては飴を受取つて行きます。女の持つて來た錢を爐の火に翳して見ればすつかり錆びついて現在通用してゐる金とは思はれません。與助がお金を計へながら異体の知れぬ女のことを思ひ出してゐると、此の時とん／＼と板戸が鳴りました。はつとした與助は途端に背筋に冷たいものがすうつと一すぢ本能的に流れました。

雪は何時止んだのでせう。すつかり霽れて外は凄い程の星月夜になつてゐました。矢張り例の女

でした。星空を背景に女はいつものやうに淋しい顔で一文錢を差出して飴を求めました。錢を受取る拍子に女の指先が與助の掌に觸れました。それはぞつとする程の冷たさでした。

「毎晩遲くなつて相濟みません。」女はにざりとした笑ひを口邊に浮べて一禮すると歸つて行きます。

與助はむうんと臭ふ掌の錢を眺めました。錢からは目に見えない妖氣がもや〳〵發散してゐるやうな氣がしました。ざらつく錢の觸感にさへ嫌惡を感じまして與助は邪慳に錢を笊の中に投げ込むと、雪沓を足さぐりで突つかけて開け放したまゝの戸口からぱつと表へ飛び出しました。別にどうしようといふ明瞭な意識があつた譯でもありませんでしたけど、戸外に飛び出た與助は、星明りを透して白雪の上に女の姿を求めました。與助はぶるゝつと顫へて大きな嚏を一つすると急いで家の中に飛び込んで圍爐裏にどん〳〵火を焚いて煖りました。考へれば考へる程怪しい女です。

可成世間の廣い與助でしたが、あんな女はこれまで見たことも聞えたこともありません。(一體何處からやつて來るんだらう。隣村かしら?・それにしては夜更けてから來るのが變だ。又本當にさうなら夜中殊に吹雪の晩なんか選ぶ必要はちつともないぢやないか。自分の村には勿論ゐる筈がない。それからあの顏色はどうだ。まるで此の世の人とも思はれない。その上あの手の冷たさだ。あれでも温い血の通つてゐる人間だらうか。)と與助は考へまして、

「よしつ。今度こそ後をつけてやれ。」と決心しました。もと〳〵根が普通の百姓や商人とは違ふ境遇にある男で、年から年中旅から旅へ香具師的放浪の途を辿る與助でしたから度胸の据つた人間でした。最初薄氣味惡く思つた心は何時しか巧奇心の捕虜となつて、異体の知れぬ女の正體を頻りに突きつめて見たいといふ心に變つて來ました。

翌日はからりと晴れた絶好の日和で朝から夕方まで續いた快晴は夜に入つても冴えかへるやうな寒さが骨身に徹するだけで、滿天の星屑は眼に痛い位よく晴れた空に輝いてゐました。快晴に惠まれて與助の店は大繁昌、飴は賣切れさうな盛況でした。與助は豫ねて心に期するところがあるので一片の飴を笹にくるんで用意して殘しました。夕飯が濟むと爐端に胡坐組んだ與助は時刻の來るのを待つてゐました。すると矢張りやつて來ました。大急ぎで女に飴を渡すと與助は錢の手觸りも惡臭も忘れて、身支度も甲斐々々しく戸外に出ました。ずきりつと身内が引き緊るやうな氣持がしました。煖い榾火の側から寒い夜氣の中に出た皮膚の刺戟も忘れ果てゝしまひました。嫌な感じの錢を掌の中に汗ばむ程握りしめた與助は女の行方を目で求めました。村中の方へふらふら、ふらふらつ、と歩いて行きます。越後としてはまださう雪は深いといふ程の積り方ではありませんでした。けれども膝を沒するに十分足る雪は、晝間人の通つた跡が夜氣のため凍つてつる〳〵し、淡い星影

をさへ宿してゐました。與助は幾夜となく毎晩續けて飴買ひに來る女ながら、これまで女の着衣や履物などに對しては一度も注意を拂ひませんでした。目を瞑つても浮かんで來るのは、蒼白な顏色と、額にほつれかゝる二三本の後れ毛及び、氷のやうな手の觸感だけでした。今夜だつて女の足を見極めることなんて到底出來ませんでした。しかし幾ら雪が降つてゐないとはいへ、此の冴えかへる寒氣の夜に女が防寒具らしい物は何一つ身に着けてゐなかつたことだけは事實でした。

白皚々たる雪の道を女は、ふら〳〵ふら〳〵と影繪のやうに歩いて行きます。殆ど宙に浮いてゐるかと思はれる歩きつぷりでした。が、なか〳〵足が速いので與助は息せきゝつてついて行きました。ともすれば朧に霞む夜氣の中に包まれて姿を見失ひさうになる女の後姿に與助は食ひ入るやうな眼を注いで、一歩でも間隔を狹めよう、女を見失ふまいと努力したので、背中や腋下には汗がしとゞに湧き出ました。ふら〳〵ふら〳〵女は寢靜まつた村中を進んで行きます。

「はてな？ぢや何處かの家に泊つてゐる女ぢやなかつたんだな。」と呟いてゐる中に女は村を與助の家とは反對側に出きらうとしてゐます。與助はいよ〳〵不審に堪へません。女の足はどうやら村外れの寺、憲法寺に向いてゐるやうに思はれました。心中後悔に似たものを覺えながらも與助は更に勇を鼓して女の後を慕ひます。女はお寺の石段を上りはじめてゐます。

「あつ！」女は雪で膨れ上つた寺の山門を拔けても庫裏へは足を向けてゐません。今度は道のない雪の上をお寺の裏手、墓地へと進んで行きます。依然として、ふら〳〵ふら〳〵つと體を動かして行きます。與助は物に憑かれたやうに女の姿に引かれて、雪の中を轉げつまろびつ、もう一切無我夢中でした。影のやうな女の後姿は未だ石塔の頂の露れてゐる墓地をどん〳〵通り拔けて、墓地の隅にある無緣佛を埋めてある方へ動いて行きます。墓碑の蔭に姿を見失ふ虞はありませんでした。と急に女の姿が宙に泳ぐやうな恰好で一寸高く上にのびたと思つたら、ぱつと姿が見えなくなつてしまひました。宙に浮いて暫時低迷するやうに見えたと思つたら忽ち姿の消えてしまつた女を、與助は手の甲で眼を擦つて求めました。しかし女の姿はふうつと搔き消すやうに見えなくなつた限り二度と姿を現しませんでした。雪の中に股まで埋つた與助は眼をぱち〳〵やつて凝立してしまひました。衣服に浸みこんだ汗を背筋にひやりと感じて我にかへつた與助が改めて四邊をきよろ〳〵見廻した時、あつ！微かな赤ん坊の泣き聲が耳に入りました。深閑とした氣を慄はせて聞えて來るのは紛れもない人間の嬰兒の泣き聲です。漸く現實にかへつた氣持で與助は頻りと耳傾けて泣き聲のよつて來る場所を確めようとしたけれどもさつぱり見當がつきません。聲を頼りにそれと思はれる方角へ進み出ようとしたけれども、全く現實にかへつた與助には今度はもう一歩も動けませ

ん。積雪から片足引き拔くにも容易ならぬ努力を要します。おまけに乾きかけた汗はぞく〴〵する寒氣を伴つて惡感さへしました。やつとのことで與助はお寺の山門まで自分の足痕を戻りました。

圍爐裏にどん〴〵火を焚いて煖りながら、與助はぢつと考へました。かうして自宅に歸つた與助の腦中不可解なものがぐる〴〵渦卷きました。飴買ひに來る女…死人のやうなその觸感…墓場…赤ん坊の泣き聲、繰り返し繰り返し同じことを何遍となく考へ續けて到頭夜を明かしました。夜が明けると與助はお寺を訪ねて住職に面會しました。そして一切の顚末を物語つて、無緣墓地發掘の相談を持ちかけました。すると憲法寺の住持善海和尚は、

「いやさう言はれると愚僧にも些か思ひ當るふしがないでもないて。といふのは、左樣遂五六日いや七八日位前からかな、風の酷い日になると墓地の方から嬰兒の泣き聲が聞えて來るやうな氣がするのでな、妙なこともあればあるものぢやと不思議に堪へなんだのぢやが—よい事を聞かせて吳れました。早速村に觸れを廻しませう。」と村の重立つ人を寺に招いて談合いたしました。色々と意見を述べ合ひましたが、墓地が無緣佛を埋めるところといふことから搜索の範圍が狹められて、とゞの詰り秋の晚に村外れに斃れてゐた身許不詳の旅の女を埋葬した墓地を掘り返して見ることに相談が纏まりました。

朝來空には雪が緩やかに舞つてゐましたが、お晝過ぎて此の灰色の空に竹法螺が高く響くと、村人は蓑笠に身を固め、手に〴〵鋤鍬或は木鋤などを持つて憲法寺の山門に集つて來ました。異常な緊張を顏に漲らした村人達は、住持善海竝びに飴屋與助の先導で、無緣墓地を圓陣で取巻きました。流石墓地のことゝて直ちに手を下しかねて一先づ聞耳立てましたが、何の物音もしません。墓地は恰も人無きが如く空に雪のみが音もなく舞ひ續けるだけで、劫初の如き靜寂に包まれました。

あつ！此の時微かに聞えて來ました。紛れもない赤ん坊の泣き聲です。しかし微かな極く微かな聲でした。素破つとばかり俄に色めき立つた村人は、今は何の躊躇も遲疑もなしに斷續する嬰兒の泣き聲を賴りに、それと最初目星をつけた場所の積雪が分けられました。續いて鋤鍬は現れ出た土饅頭を發掘し始めました。掘り返しながら村人は俄かに雄辯になつて口々に喋りながら手を働かしてゐます。

「矢張り行き倒れ女の墓だ。」

「ちがえねえ。米こしられえの最中だつた。」

「さうだ。何處の者か分らねえんで、和尙樣にお經上げて貰つて埋めた女の墓。」

「うん。未だ若い女だつたども、倒れたつ限り口も利けねえかつたんだからなあ。」

「だつてお前、死んだ女は赤ん坊なんか連れてやしめえ。一人旅だつた筈ぢやねえか。」

と、人の輪の中央に土葬の棺が出て來ました。赤ん坊の泣き聲は棺桶の中から盛んに洩れてゐます。がつちり結へてある棺桶にかけた繩がゆるんで、棺の蓋が少し横にずれてゐます。

恐々覗いて村人の一人が、あつと驚きの聲を發しました。それも道理、棺の中には未だうら若い女の屍體が、生れて旬日を出ないだらうと思はれる、裸體の嬰兒を懐に抱いてはいつてゐました。蓋はねのけて見れば、女は明らかに死んでゐましたが、泣き聲でも分る通り赤ん坊は立派に生きてゐます。

あまりに意外な光景と事實に、與助はもとより善海和尚始め村人一同も唖然として暫時言葉もありませんでした。しかし一切が了解出來ました。和尚さんは、

「何と村の衆、生きる力といふものは強いものではないか。いやそれにも増して強く尊いのは母が慈愛の魂ぢや。旅のお女中は葬られる時懐妊中だつたと見える。迂濶にも我々はそれを見附け得なんだ。そして子は大地が萬物を育くむ力によつて土中で生れ出たものと見える。」と言ひました。

不幸病魔に侵され、空しく旅路の露と消え果てた薄命の女は、遂に生國も名前も分らぬまゝ村人の情で葬られ、身は死して後土中で出産したので、母の魂魄は愛兒を育てるため六道錢をもつて與

助の家へ、夜々飴を求めに通つたのでした。土中の温氣と亡魂の慈愛によつて今日まで奇しくも命長らへてゐた嬰兒は、慈愛の乳房を哺むかはりに飴をしやぶつて來たのです。これで總べてが明瞭した譯です。怪談でも物の怪でもなかつたのです。事情が判明して見るとそれは一掬の涙なしには聞かれぬ話でした。

子供は―男の子でしたが―早速引き取られ、母なる若い女の屍體は改めて手厚く葬られました。子供は誰彼といふよりも憲法寺の善海和尚さんが育てることにして、村人は餘つてゐる乳をやることにしました。母の亡靈の愛に育まれた子供はかうして無明の世から有明へと救ひ出されてその生を遂げることが出來るようになりました。子供は村人の情の乳房や奇しき縁で運ぶ與助の飴で、虫けもなく日に〳〵すくすくと生ひ立つて行きました。

そして此の子は後に住持善海和尚の跡を繼いで天晴れの名僧となつて村人の歸依を集めたといふことです。しかし、その和尚にはちやんと名前もあつたに違ひないんですが、誰も名前を呼ぶものがなく一般に「雪和尚」で通つてゐました。といふのはどういふ譯か、その雪和尚は夏になるとすつかり不元氣になるのでした。夏でなくても明るく強い日光の下では兎角その潑剌さを缺くのが常で、その反對に冬や物の蔭に於ては無類の活氣を示しました。村人は

「あれは屹度生れがけから雪の地下に埋もれてゐたからだらう。」と噂しあひました。

此のお話はこれでおしまひです。

私の祖母が子供だつた時分には未だ此の雪和尚がもう相當の高齢にもかゝはらず健かで、よく檀家廻りにやつて來たものだつたさうです。夏分は戸外を歩くにはいつも特別大きな網代の笠を深々と被つて往來し、お葬式なんかで、野邊に立つて緣導わたす際などには決つて大きな傘をさしかけさせて日蔭にゐたさうです。それは晴雨にかゝはらぬことだつたとか申しました。

これは私が未だほんの小さい時にきいた話ですから、お寺の名前や坊さんの名など或は間違つてゐるかも知れませんが—えゝ、私の祖母は私の七歳の時亡くなりましたし、その後一家を擧げて當地に轉住したので遂に機會を得ないので私も故郷には歸つて居りません—それについて祖母は確かこんな蛇足を加へてゐたやうに記憶してゐます。

『それでなう、お寺様はそれまで何寺でも長柄なんか用ゐなかつたもんぢやが、後にはうちのお寺様の眞似ばして何寺の坊様も皆長柄ばさすようになつたもんぢや。』—えゝ今になつて考へたらそんなこと、自分の檀那寺を立派にいひたい祖母のこじつけに過ぎなかつたことと位分りますけど、その頃は感心して聞いて居たものでした。」

二二、三味線石の話

古志郡虫龜村は、瀧澤馬琴の「南總里見八犬傳」中に出て來る越後の地名の一つである。八犬士の一人犬田小文吾悌順が北魚小千谷の石龜屋次團太方に逗留中、旅の徒然を慰めようと次團太の弟子の案内で鹽谷と木澤兩村の境に闘牛を見物に行き、折から暴れ出した虫龜村の須本太といふ猛牛を怪力で捩ち倒し、衆人の災を未前に防いだといふ話は普く人口に膾炙してゐる話である。

此の虫龜村は海拔三百米の高所にある土地で東に猿倉を控へ西に金倉山を望む山中の村であるが、此の虫龜村の外れに一箇の大石が横たはつてゐる。

以下此の大石に纒る傳奇物語である。

時は何時代のことか明らかでないが、それは冬のことであつた。

最早今年も暮れようとする或る日の夕方、虫龜村目指して鈍い歩みを續ける二人連があつた。見れば女二人だつた。憐れなことには二人共盲で杖を頼りに歩いてゐる。油布に入れて、女達の背中の荷物の一番上にのつてゐるのは三味線らしい。とぼ／＼と暮れかゝる雪道を辿る盲女達の足

はともすれば鈍り勝ちだつた。二人ともひどく貧しい服装である。これではなか〳〵宿を貸す人も滅多になからう。昨日も今日も雪に狂ふ冬の日の旅の辛さ苦しさ、まして不自由な身でそれは察するに餘りある惨めなざまだつた。

紐がちぎれて今にも頭から吹き飛んでしまひさうな破れ笠、油つけのない頭髪は金倉颪にばさ〳〵そゝけ立ち、額に被さり頬に絡り雪を吸つてそのまゝ凍りついてしまひさうに見え、寒さのため板のやうになつた合羽は裾の方から後へ靡き、辛うじて頸の所の紐で體から離れずにだけゐる狀態だ。杖持つ手も指先の方から甲にかけて感覺が失はれ、空しく杖が積雪の中に沈んでその度體が前へのめりさうに泳ぐ。前の人の背に手をつけて進む後の女は、前の人とそのまゝ同じ動作を繰り返して行く。倒れないのが寧ろ奇蹟だとでもいひたい位だ。草鞋も爪掛もぼろ〳〵で一足毎に藁がばさりばさりと風に動く。

難行苦行幾時間の雪道だつたらう。それでも彼女達は、吹雪と宵暗で人の顔の見分けもつかなくなつた頃、やつと虫龜村の入口に到着することが出來た。盲人の敏感さ、村の入口近くに家のあることを感じた彼女たちは、疲れ切つた體に一夜の安息を與へるべく一歩又一歩、よろめきつゝたじろぎつ、一軒の家に近づいて行つた。

白い雪の中に洞穴の如く口を開けた、闇にも黒い玄關口まで辿りついた彼女たちはもう〳〵とだつた。立つてゐることさへ覺束ない。どうして訪れの聲が出よう。しばし體を休めてと玄關の壁にもたれてしまつた。

「やつと着いた。荒からも逃れ得た。」といふ安堵感は、彼女達の張り詰めた心を一時に弱めてしまつたのだつた。呼吸さへもあるかどうかと思はれる風情で、薄眼を開き、輕く口をあけたまゝ、壁にもたれると立ちながらこん〳〵と彼女達は寢入つてしまつた。

不意に入口のぴか〳〵光る重さうな立派な戸がから〳〵と快い音を立てゝ開いた　出て來たのはこの家の主人利兵衛だつた。恰幅のいゝ體はさも温かさうに丸々と着膨れてゐる。この雪の黄昏何處へ行くのだらう。贅澤な羅紗の首卷をし雪合羽を羽織つてゐる。脛をすつかり包んで膝頭まで來る藁の深沓を穿いた嚴重な足拵へで、片手に提灯他方に笠を持つて一歩雪の中に踏み出さうとした利兵衛は、忽ち玄關の壁に靠たれて佇む女二人を見つけて足を止めた。提灯の火を無遠慮に突きつけると直ぐ、利兵衛はその幅廣で精力的な顔を不快氣な色で埋めた。油ぎつた額には見る〳〵太い癇癪筋が浮き眼には邪慳な光が漂つたかと思ふと噛みつくやうな口調で言ひ出した。

「もしつ、お前さん達はどなたですい。どうも人の玄關先に斷りもなしに這入り込まれちや大迷

惑だね。用があるならだが、さもなきとつとと出て行つて貰ふべえか。」と利兵衛の出て來たのも氣がつかない位疲れきつてゐる二人の女は、はつと目が醒めたが口を利くだけの氣力が出なかつた。

合羽の下からちらりと覗かせた腰の風呂敷包を蔽いて利兵衛は續けた。

「とつと〻出て行つて貰ふべえ。儂あこれから一寸用で出掛けるけに、もし用があるんだつたらさつさと片附けてくらつせえ。」此の言葉を聞くと、未だ生きてゐる證據のやうに女達は始めてもそりと一つ身動ぎしたが矢張り嘆願の言葉が未だ口に上らなかつた。

「やい〳〵、見れば手前ら瞽女ぢやねえか。何だ圖々しい。物貰ひの癖に人の玄關先などに這入り込みやがつて……。そんな哀れげの恰好なんずしたつてその手に乘るけえ。とつと出て失せろつ。薪雜棒食はせるぞつ!」俄かに利兵衛の言葉が變つて、さう言ふと同時に女の一人を雪の狂ふ戸外に突き飛ばした。續いてもう一人。突き出されて女達はへな〳〵と積雪の中にめりこんでしまつた。

立ち去らねば何時止むとも知れぬ利兵衛の罵詈雜言に、喋れない程疲れてゐる二人の盲女は二度三度空しい努力を試みた末、でもやつと起ち上つた。けれども突き飛ばされる時一旦手放した杖は盲目の悲しさ、再び手にすることが出來なかつた。杖を失つた盲女達は雪混りの風に飜弄されるやうに、盲滅法戸外にさまよひ出て行つた。

闇に吸はれて吹雪に消えて行く哀れなる瞽女の後姿を見送つた利兵衛は忌々しさうに大きく舌うちをして、

「糞つ、緣起でもねえ。これで今夜の首尾にもけちがついた。出直しだ、明日。」と呟いて、板の大戸をぴしやつとやけに閉めて猿落しまでさしてから家に上つて來た。

廣い大きな家である。臺所には大きな爐がきつてあり、二三人の雇人らしい男女が焚火の光の中で動いてゐた。始終の樣子を見てゐた彼等は苦りきつた主人の顏を見まいとするもの〻如く、今迄喋つてゐた內緒話もやめ、只管利兵衛の劍幕に脅えて、ちらりと上目使ひの一瞥を投げた限り默々と働き續けてゐた。合羽を脫ぎ笠を緣端に置いた利兵衛は不機嫌な荒い足取りで奧にはいつて行つた。座布團の上にどつかり大胡坐くむと太い銀煙管に大火鉢の火を移して一息すふと、やけにぽうんと火鉢の緣を敲いて吸殼を拂つた。

「飛んでもねえ邪魔者のお蔭で命冥加な奴だ。どうせ一晩待つたたつて鼻血さへ出やしねえが、蒲團でもひつぱいで來るべえと思つたのに、胸糞の惡い乞食瞽女奴のために折角の商賣も形なしだ。」と獨言呟きながら、燈心をかき立て〻背後の用簞笥へ腰の風呂敷包をしまつて、又鍵束をじやら〳〵鳴した。

利兵衞は富有な金貸だつた。村きつての富限者ながら利殖のためには義理も人情も辨へぬ酷薄無慚な男だつた。やつとのことで村についた二人の瞽女も何といふ不運な女達であつたらう。選りに選つて此の利兵衞の玄關先に佇んでしまつたのだ。助けて貰へぬばかりか、突き出されてしまつたのだ。しかし丁度折も惡いには惡かつたのだ。利兵衞が貸金取立に出掛けようとするその矢先にぶつかつてしまつたので、すつかり利兵衞をおこらせたのだ。おとなしい奉公人達も主人利兵衞今宵のやり口には義憤を感じてから腹を立てゝゐたのだ。

第一は村で評判の實直者仁助が重なる不幸のため利兵衞から金を借り、とゞのつまり仁助が昨今枕も上らぬ病の床に呻吟してゐるにもかゝはらず、枕元で毎日貸金の再促をし、々今夜金が返せなかつたら、證文の期限を楯に、此の冬の寒空に病人の着てゐる夜著を剝いで來るといつて出かける門口、今度は目に觸れた哀れな三味線彈きの女を雪中へ突き出してしまつた。

利兵衞の心は鬼か蛇か？邪慳とも因業ともいへようのない所業だ。が、しかし誰あつて利兵衞に對して口をきかうとする人はなかつた。何故なら、とても人の言葉など聽き入れる人ではない。それからお互自分が愛しかつた。唯々目を見合はせて極度の憎惡と反感を示したのが最大の反抗に過ぎなかつた。巨富を抱いたまゝ、後讓るべき子一人持たずに、人々から憎まれつゝ只管財を守り殖すことのみに腐心する利兵衞も、亦考へれば氣の毒な人間といはねばならなかつた。

金貸し利兵衞の玄關を追はれた瞽女二人は闇と吹雪を衝いて、物に憑かれたかのやうに無茶苦茶に歩いた。盲人が命の綱と賴む杖さへ失つた二人は、笠も合羽も風に奪はれ、二足行つては倒れ三足歩いては雪の上に匍ひながら狂亂の歩みを續けて、知るや識らずや元來た道を逆行してゐた。しかしこれも長くは續かなかつた。前を行く女が疲勞のため、膝まで沒した足を拔きかねたのに心のみ前に出たのでばつたり前のめりに倒れて未だ起き上れない上に後の女が又重つて倒れてしまつた。

女達はもうどうすることも出來なかつた。でも、軈て雪の上に座り直したのは、それでも未だ生への執着が殘つてゐた爲か、それとも本能的の衝動に驅られての結果だつたらうか。それでも今までこれだけはよく、背中から失はずにゐたと思はれる荷物の中から、貧しい着換への衣服二三枚を取り出すと、二人の女は頭からそれを被つた。これは雪の猛威から脫れようとする彼女たち最後の果ない努力であつたらしい。

見えぬ目にお互の手を搜り合つた二人の女は犇と手を握り合つた。それから莞爾り笑つて首肯きあふと、次いで油布を拂つて取り出したのは三味線であつた。感覺の絕えた手に桿を握り撥を摑む

とやがて彈き出した。糸に合はせて、乾々の唇をついて流れ出た嗄れ聲。

へ小苗こまかに手をこめて
　秋はかべをば刈るやうに。

悲しげな唄聲が吹雪にのつて闇に消えて行く。繰り返し繰り返し歌ふ彼女達の顏には法悦にも似た歡喜の光が漂つて、唄はいつ止むとも見えずに續いた。雪は容赦なく襤褸着物の上から彼女達を覆ひ隱して行つた。が、三味と唄聲は杜切れ〳〵にいつまでも續く。

その夜の眞夜中頃、熟睡してゐた村人は、突如として耳朶をうつた落雷のやうな物凄い一發の音響に夢驚かされた。山間の村を震駭させた一大音響はたつた一度、再びもとの靜寂にかへつた。

翌日それは正月元旦だつた。新雪を踏んで產土神へと人々は朝起きを競つた。

やがて、からりと晴れた東天に旭日を拜した村人は大晦日の晩の出來事については忘れてしまつた人もあつた。事實たとへ覺えてゐたとしても、お目出度うと屠蘇機嫌で他を語る暇はなかつたに違ひない。

けれども山の中腹にある道の傍に天から降つたか、地から湧いたか巨大な石が、往來を遮るやうに橫たはるのを發見するまでには長くかゝらなかつた。噂は噂を生んだ。が、あの三味線彈きの哀れな姿は何處にも發見されなかつた。

大石の出現に次いでもう一つ村を賑はした話題は、年が改まると共に豹變した金貸し利兵衛のやり方だつた。彼は一切の貸金を棒引きにすると宣傳して、人々から取つて置いた證文は一枚殘らず人の見る前で燒いてしまつた。百姓仁助の家に金穀衣類藥餌などを贈つて懇ろに病氣を見舞つてもやつた。

その他貧しい人、苦しむ者、困る家に對して利兵衛は自分の所有する一切の金品を吝まず惠んでやつた。

鬼の利兵衛は一朝にして佛利兵衛と改め呼ばれるやうになつた。しかし、それと共に多くの金品を散じた利兵衛はかはりに金では購へぬ人情をしみ〴〵と味はふことが出來た。

これ以來、毎年雪の夜ともなると村外れにある彼の一夜にして出現した大石の下から、斷續して聞える覺束ない三味線の音につれて田植唄

〽小苗こまかに手をこめて、秋はかべをば刈るやうに。

といふ唄聲が聞えて來ると今に傳へてゐる。

（附）「陸中國上閉伊郡笛吹峠を或る雪の降る日に一人の盲人が通り難澁の擧句、辿りついた山麓青木村某家に宿泊を乞うて拒絶され、遂に凍死した。それ以後、此の某家に生れる子供は代々盲である。」

「越後三條の人が或る時河童の腕を切り取り、その嘆願にもかゝはらず返さなかつた。此の家の子孫には以後必ず身体の一部分に黒筋があるやうになつた。」

右の二つの傳說と同一の思想から出た一種の畸形傳說であるが、又勸善懲惡思想の露骨な混入もある。此の種傳說の研究には柳田國男先生の「一つ目小僧傳說」に關する研究があるから贅言はさし加へぬ。

越後の國 續雪の傳說 終

越後の國
續雪の傳說
出文協承認
ア440.823號

昭和十八年二月十日印刷
昭和十八年二月十七日發行
（貳〇〇〇部）

㊙定價金壹圓六拾錢

著者　鈴木直（すゞきなほし）
長岡市表町四丁目七九一番地
發行者　目黑十郎
發行所　株式會社長岡目黑書店
振替東京三六一九番
（日本出版文化協會員番號一二二五一二號）
長岡市表町三丁目
印刷者　岩瀨直藏
長岡市坂ノ上町二丁目
印刷所　北越印刷株式會社
（東新二四〇）
配給元　日本出版配給株式會社

95
26